東南アジア研究　26巻1号　1988年6月

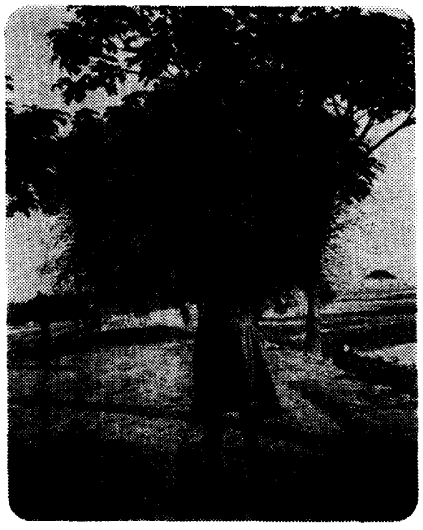
現地通信

ハオールの村から

内田晴夫*

バングラデシュは今が一番よい季節だ。田植えの済んだ田の畦に腰をおろすと，遠くにインドとの国境のメガラヤの山なみがかすんで見える。その上には白い雲を浮かべた青空が広がり，頬にそよ風が気持よい。ポンポンポンとポンプで田に水を入れる音が，遠くから聞こえて来る。小鳥のさえずりが聞こえる。小麦の緑と菜の花の黄が目に優しい。バングラデシュ東部の片田舎，ジャワール村ののんびりした農村風景である。

ジャワール村は，ハオールと呼ばれる雨季の湛水地帯の縁に位置する人口7,000人の僻地の村である。ハオールという名称は，ベンガル語の海を意味するシャゴールという言葉に由来すると言われているが，雨季には世界の最多雨地域であるインド・アッサム地方から流れ込む水を一身に受け，文字通り陸の海となる。さらに乾季になって水が引いた後にも，3,000余りの湖沼が散在する世界的にもスケールの大きな大湿地帯である。雨季には海と同じく波が立つため小舟で沖に出ることができず，また時には大波が村の外縁を襲うこともあるという。このような水文環境にあるため，雨季には縁辺の高みにジュートやアウス・アマン稲作が行われるが，ハオール内部での農業活動は全く停止してしまう。しかし，時には狂暴な牙を剝き出すハオールもやがて乾季になると，自然の恵みを惜しげもなく与えてくれる。広大で肥沃な土地，湖沼に留まる豊富な水と魚，鮮やかに咲き誇る花々，風そよぐ緑の苗，小鳥のさえずり……そしてそれらの調和の織りなすのびやかな田園風景。



マスタードの収穫

のんびりした村の牧歌的風景の中で，今年は人々の顔がきつい。4年に1度のユニオン（郡）議会の議長と議員の選挙なのだ。バングラデシュのユニオンは，3つのワードと呼ばれる選挙区からなり，全体で1名の議長，各ワードから3名ずつの議員が選挙で選ばれる（ジャワール村は2つのワードにまたがっている）。ただしその後，新議長が各ワードから1名ずつの女性議員を任命するのでユニオン議会の構成員は合計13名になる。ジャワール村が含まれているユニオンの総有権者は8,885人で，議長立候補者は6名，議員立候補者は各ワードで10，11，12名であった。

さて，もともと政治好きで騒ぎ好きのベンガル人であるが，普段は刺激の少ない村の生活である。村人はここぞとばかりに熱狂する。村全体が選挙一色に塗りつぶされ，老いも若きも熱気の坩堝の中に身を置いている。文字の読めぬ者の多いバングラデシュでは立候補者が自分のマークを作り，選挙日にはこのマークに印を付けることによって投票する。したがって立候補者は自分の名を売り込む代わりに，このマークを覚えさせることに夢中になる。そのため，「犁印（に投票を）！」「魚印（に一票を）！」と叫ぶことになる。連呼，連呼，ただひたすら連呼である。立会演説会などは村の選挙では見ることも

* Haruo Uchida, The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

村での選挙行進

できない。自分のマークを染め抜いた幟を先頭に立て，選挙運動と称して選挙区内を闊歩する。声を合わせ，拳をつき出し，「パイプ印！」「水壺印！」と叫びながら歩き，時には走り，そして飛び跳ねる。議長候補者の行列が300人の団体（イスラム国家の悲しさ故，女性は子供達だけだったが）で我々のオフィスの前を通り過ぎた後，彼らが戻って来たのは2時間後だった。その間ずっと歩き詰め，叫び詰めである。戻って来た彼らはいずれも埃にまみれ，声はしわがれてガラガラであるがその元気さは疲労をほとんど感じさせないかのようであった。

しかしこのような熱気ある「選挙運動」が繰り広げられたにもかかわらず，ジャワール村での選挙は無効となり，再選挙されることになった。投票日，選挙会場にユニオンから派遣された投票監督官が，投票開始後に会場から追い出されたのだ。しかも議員立候補者が自ら投票箱と用紙を自宅に持ち去り，自分のマークで一杯になった投票箱を再び持って来たという。何とも滑稽でアホらしいと苦笑したくなる事件だが，あきれてばかりはいられない。今回の選挙で全国で200人が死亡し，4,000人以上がけがをしたと新聞は報道しているのである。報告されていない事件も多数あるであろうから，それらを含めると実際にはこの数字を大きく上回ることが容易に予想される。ジャワール村で死傷者が出たという話はまだ聞いていないが，まかり間違えば暴力的衝突に発展する危険性を孕んでいるのは事実だ。隣村では選挙監督官が投票用紙を多数要求した者に対してこれを拒否したため，ナイフで刺され重傷を負っている。友人のベンガル人の兄は医者だが，地方の中心都市の病院で廊下まであふれたけが人の治療のため3日間家に帰っていないという。また，友人自身は，その都市の議長候補者の一人が殺されているのを目撃している。しかしこのような対立候補者同士の血生臭い戦いは，国家レベルの政治とは全くと言っていいほど関係の無い「政治活動」なのだ。確かにこの国は，現在，政治的に大きな問題に直面している。昨年末に解散した国会議員の選挙が中止され，それに反発する野党勢力が中心となってゼネストを呼びかけ，ダッカでは外出を控えざるをえないことも度々あるほどである。この国会議員の選挙をどうするかが，バングラデシュの当面最大の問題である。このような厳しい政治状況下にあるバングラデシュであるが，しかし，やはりそれとこれは違うのだ。地方議会の選挙に関連して生じている死傷事件は主義主張の問題ではなく，徹底的な自己利益のための戦いなのだ。ジャワール村で投票箱を持ち逃げした候補者の一人がかつて言ったことがある。「議長800タカ，議員400タカ（女性は半額）の安い給料のためじゃない。ユニオンから渡される小麦を横流しして，ガッポリ儲けるためさ」。バングラデシュの村落社会を覆っている，力ある者達のわがままな戦い。地域内部の利権争いであるが故に村人が巻き込まれ，そして傷つく悲惨さ。今回のユニオン議会の選挙は，バングラデシュという国が抱え込んでいる地域的ボス支配の現実を，露骨に，痛々しくもさらけ出す結果となった。

遠くで鳥が鳴いている。田植えの終わった畦に腰をおろしぼんやり遠い山なみを眺めている。瞬間と永遠。現実と未来。明るさと哀しさ。生きることに精一杯な人々。そしてそのために騙し騙され，蹴落し蹴落される者達。正反対のものが背中合わせに貼りついているこのバングラデシュという国。ボースの熱情も，タゴールの詩情も，パールの理性も何処へ行ったのか。そしてこの国は何処へ行くのか。とりとめもない想いが浮かび，流れ，渦を巻き，そして新たな想いがわきたち，また消え，それを眺めている。ハオールの村の不思議な午後である。

（京都大学東南アジア研究センター助手）